

## 403 当内科における原発性肺癌の原発部位別の臨床的検討

長崎大学第二内科

○力竹輝彦, 副島佳文, 松本好幸, 鶴川陽一, 坂本 晃,  
野野謙治, 岡三喜男, 神田哲郎, 原 耕平

目的：原発性肺癌の発生部位別に、性別、年齢、組織型、臨床病期、ブリンクマン指数、予後等に差があるかを検討した。

対象：昭和50年1月より昭和60年12月までに当内科入院となった原発性肺癌476例のうち、原発部位が確認できた455例である。

成績：右側発生273例、左側発生182例であり、肺門型は85例(18.7%)、末梢型は370例(81.3%)であった。各葉別では、右上葉109例(腺癌50例、扁平上皮癌30例、小細胞癌10例、大細胞癌17例、その他2例)。右中葉26例(腺癌17例、扁平上皮癌2例、小細胞癌4例、大細胞癌3例)、右下葉83例(腺癌46例、扁平上皮癌21例、小細胞癌9例、大細胞癌6例)、左上葉97例(腺癌55例、扁平上皮癌22例、小細胞癌9例、大細胞癌9例、その他2例)、左下葉55例(腺癌31例、扁平上皮癌16例、小細胞癌5例、大細胞癌3例)であった。また、Kaplan-Meier法による原発部位別50%生存日数は、右上葉333日、右中葉215日、右下葉352日、右肺門216日、左上葉308日、左下葉337日、左肺門190日であった。

## 405 腺癌における血痰の予後因子としての意義

栃木県立がんセンター<sup>1</sup>, 国立がんセンター<sup>2</sup>

○宮沢直人<sup>1</sup>, 土屋了介<sup>2</sup>, 成毛韶夫<sup>2</sup>, 末舛恵一<sup>2</sup>

対象：国立がんセンターで昭和48～55年に切除された原発性肺腺癌291例、手術死亡は除く。

成績：初診時血痰60例(21%)、無血痰231例(79%)で比較検討した。病理病期はⅢ期以上が有血痰では70%、無血痰では56%であった。病巣気管支次数はⅢ次より中樞が有血痰では43%、無血痰では23%であった。5年生存率は有血痰で18%、無血痰で33%、Ⅰ期例だけでみて有血痰が47%、無血痰が62%であった。

結論：有血痰の腺癌の予後は不良であるが、理由として、より進行癌が多いことその他に、より生物学的悪性度が高い点が考えられた。

## 404 肺野腫瘍陰影を呈する肺腺癌・扁平上皮癌の腫瘍径による予後の検討

東京医科大学外科第一講座<sup>1</sup>

○内藤 淳<sup>1</sup>, 於保健吉<sup>1</sup>, 雨宮隆太<sup>1</sup>, 田口雅彦<sup>1</sup>  
高橋英介<sup>1</sup>, 中嶋 伸<sup>1</sup>, 田近栄四郎<sup>1</sup>, 阿部真也<sup>1</sup>  
沖津 宏<sup>1</sup>, 林 永信<sup>1</sup>, 早田義博<sup>1</sup>

目的：肺野腫瘍陰影を呈した肺腺癌・扁平上皮癌の腫瘍径別術後生存率に関し、Kaplan-Meier法を用いて検討したので報告する。

対象：対象は昭和51年5月～昭和61年4月の10年間に当科で手術治療がなされた肺野に腫瘍陰影を呈した肺腺癌・扁平上皮癌の284例(腺癌187例、扁平上皮癌97例)である。年齢は25～83歳(平均61.5歳)、男女比は腺癌131:56、扁平上皮癌92:5である。

結果：腫瘍径からA群 $\phi < 1\text{ cm}$ 、B群 $1 \leq \phi < 2\text{ cm}$ 、C群 $2 \leq \phi < 3\text{ cm}$ 、D群 $3 \text{ cm} \leq \phi$ の4群に分類した。腺癌におけるB、C、D群の50%生存期間は120か月、65か月、24か月で、扁平上皮癌におけるA、C、D群の50%生存期間は120か月、74か月、32か月であった。いわゆる末梢早期肺癌を含むA・B群の生存率に関してLogrank-testで検討したところ、腺癌のB群はC群との間に有意差を認めず、D群との間には有意差を認めた。また、扁平上皮癌のA群は少症例数のため比較検討が困難であったが、いずれも術後35か月、120か月再発転移なく生存中でありC・D群に比し良好な経過を示す傾向にあった。以上より、肺野腫瘍陰影を呈する肺腺癌・扁平上皮癌の腫瘍径と術後生存率との間にはある程度の相関関係がみられる傾向にあった。

## 406 径2cm以下の肺野孤立性病変の診断過程 結核予防会結核研究所<sup>1</sup>, 同附属病院<sup>2</sup>

徳田 均<sup>1</sup>, 尾形英雄<sup>2</sup>, 水谷清二<sup>2</sup>, 和久宗明<sup>2</sup>,  
小山 明<sup>2</sup>

1984～86年の3年間に、肺癌が疑われた径2cm以下の肺野孤立性病変89例に気管支鏡等の精検を行った。最終診断の内訳は、肺癌24、転移2、肺結核30、良性腫瘍9、肺炎11、その他6、未確定7である。気管支鏡検査は全例に行われ、肺癌18(67%)、結核8(27%)、全例では32(36%)に診断が得られた。13例について二度検査が行われ4例で二度目に陽性結果を得た。気管支鏡で診断の得られなかった57例中22例に経皮針生検が行われた。肺癌3、結核1、良性腫瘍2が診断された。ここで癌は21(88%)に診断がついたが、他の疾患の累積診断率は結核9(30%)、非癌全例21(33%)と低かった。癌の疑いが濃厚な8例に試験開胸が行われ、癌3、良性腫瘍1、肺炎1が確認された。確定診断の得られない例は39例で、4例が抗酸菌培養で、32例が経過観察(うち抗結核剤投与23)或いは前X-Pとの対比等にて臨床的に、結核、良性腫瘍、或いは少なくとも良性確定と判定された。追跡不能が3例あった。2cm以下の肺野孤立性病変に対する各種検査法の診断率は全体では良好とはいえないが、肺癌はよく診断されており、確定診断の得られない場合でも前X-Pとの対比、精細な画像診断、注意深い経過観察等によってよく鑑別しえ、試験開胸の必要はさほど多くないと思われた。